

---

# 未完作品（放置していた過去の産物）

聖魔光闇

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

未完作品（放置していた過去の産物）

### 【Nコード】

N2384W

### 【作者名】

聖魔光闇

### 【あらすじ】

この作品は、今までに書いた作品の中で、削除していなかった途中で挫折・放置した未完の作品です。

書きはじめは、結末や話の流れが見えていた筈なのに、時間の経過と共に薄れていき、書けなくなつて放置していました。

そのまま置いておくのも可哀想なので、私以外の方の目に届く所に置いていきます。

続きを書く予定はありませんが、もしかしたら書くかもしれません。  
連載形式で、少しずつアップしますが、初めにも言った通り、全て  
未完で終わっています。

完成図（購入）（前書き）

やる気は十分だったのですが……。

## 完成図（購入）

パッケージの可愛い仔犬の写真に騙されて、そのジグソーパズルを買ってしまった。

出来上がったら、額に入れて飾ろうとサイズに合わせた額縁まで購入して。

でも、家に帰って気が付いた。 100000ピースって何？

その日は、特に何を買おうという訳ではなかった。暇潰しがてら、近所のショッピングモールに出掛けたんだ。

入口を入って、ただウィンドウショッピングを楽しむつもりだった。服を見て。鞆を見て。テレビを見て。家具を見て。こんな服を着て、何処に出掛けようか……とか妄想してみたり。こんな服には、どんな鞆が似合うかと想像してみたり。家の家具に不満があった訳じゃないけど、もし結婚したらどんな風にどんな家具を並べようかと考えてみたりして、ショッピングモールの中をうろろろしていた。ペットショップで犬や猫を見た後、隣にあった玩具売場を見て回った。そう、あの時、あそこに行かなければ良かったんだ。

玩具売場の中で幼児用の知育玩具や、次世代ゲームマシンなんかを、別に買うわけでもなく吟味しながら、玩具コーナーをゆっくり回る。

もうすぐ、レジで出口って所まで来て、ふと目をやると可愛らしい仔犬が七匹寄り添って並んでいる写真が飛び込んできた。気になっ

って近くに寄ると、ジグソーパズルだった。  
先程ペットショップで犬を見たせいだろうか、無性にその仔犬の写真が欲しくなって、気が付くとそのジグソーパズルを買っていた。しかも額付きで。そしてそのままウキウキして家へ帰ったんだ。

「何これ？ 100000……ピース？」

家に到着して、取り出したパズルを見て衝動買いの恐ろしさを痛感した。

というよりか、100000ピースというのは初見だった。

『こんな物……存在するのか？』

現実を疑いたいところだったが、現に目の前に存在するそのものが、非現実的でない事を説明している。

【パズル自体の大きさが、極端に大きくならないように、このパズルは世界最小の大きさを作られています】

そう書かれたパズルのパッケージを開けると、更に僕は目を疑った。

『な……んだ……これ？こんなに小さい……のか？』

普段目にする1000ピースのパズルの大きさとは、比較にならない程小さかった。しかも、1000ピースのパズルが、 $25 \times 40$ だとすると、100000ピースのパズルは、 $250 \times 400$ という事になる。しかも、その額の大きさが、1000ピース用だったんだ。

『ピースの大きさが10分の1……。こんな小さいパズル……。できるのか……。？』

ある種、絶望にも近い感情が頭を過ぎり、僕はそのまま購入したばかりのそのジグソーパズルを眺めたまま、どうする事も出来ずにただ眺め続けていた。

## 完成図2（枠組み）

『さてと、どこから取り掛かるうか……』

結局、昨日は「やる気」も失せて部屋の片隅に放置したパズルだったが、買ってしまったものは仕方がないと半ば諦め状態で、部屋の中の不要物を片付けてからパズルを袋から取り出した。

『と、言ってもジグソーパズルなんて久しぶりだな。……以前やった時は……、そうだ！ 周りだ。周り、んと……枠組みから始めるんだっとな』

小さなパズルを眺めながら、気の遠くなる思いの中、僕は袋の中から蓋の中に全てのピースを移し替えると、パズルボードの上に枠組みになる隅と端のピースを取り出し始めた。

『それにしても小さい！ まだ若い筈なのに老眼になった気分だ。ふう〜！ 端っこって何個あるんだ！？』

そう思うのも無理はない。普通のパズルピースの10分の1の大きさなのにもかかわらず、普通のパズルであれば124個のところ、こいつは1296個もあるのだから。

1292個の端ピースと、4個の角ピースを探し続ける。途方もない話だった。朝起きて、部屋の片付けをしてから始めたというのに、昼前にして、まだ端ピースを探しているのだ。角ピースは見付かった。しかし、端ピースを繋げ合わせながらの作業は、僕を次第に発狂させ始めていた。

『あゝ！ もう！ 休憩！ 休憩だ！』

小さすぎるパズルピースを見る事に飽きてきた僕は、一先ず休憩がてら昼食にする事にした。

今日の昼食はインスタントラーメンにする。鍋に水を入れ、お湯を沸かすと袋から取り出したラーメンの塊を投入する。同時に餅を2個入れグツグツしたお湯の中で、ラーメンがほぐれていくのを見ながら、餅を溶かしていく。我流のタイミングで火を止め、粉末ス

ープを注ぎ込むと、スープが餅でドロドロになっている事を確認してからドンブリに移し替えた。

他人に言わせると「気持ち悪い」らしい【ドロドロラーメン】。何故この美味さが分らないのか、理解に苦しむ。見た目で判断しないで欲しい。麺と餅が餅で絡み合い、汁を飲む必要もない。しかも、ドロドロのおかげでラーメン自体が冷める事を防げるのだ。

僕は、ドロドロラーメンを堪能して食べると、机の中から秘密道具を取り出した。

『ふっふっふっ！ これさえあれば、もう少しスピードアップが望めるぜ！』

秘密道具をパズルの場所に置き、ドンブリと鍋を洗って片付けた。『さてと、第二回戦始めますか！』

秘密道具を片手に座り込むと、パズルに向かい合った。

端ピースと角ピースの組み合わせを再開する。それにしても絵が見にくい。

『しかし！ ここで登場、秘密道具！ ！ こんな時は、やっぱリドラ○もんにかぎるな。うおっと、ふざけている場合ではないな！ 僕は傍らに置いてあった【秘密道具】虫眼鏡（学術的に言うところ、べと言ったりする）を左手に握ると、ピースに書かれた絵柄を確認しながら、作業を進めていった。

『こ、こんな筈では……。話が違うではないか！ 謀ったな！ 謀りおったな越後屋あ！』

と、ふざけている余裕などない。あれから3時間が経過した。しかし、まだ端ピースは完成しない。というよりも、絵は見易くなった。絵は見易くなったが、組み立てスピードは大幅ダウンだ。あれから3時間、3時間経つのに、右端のみしか完成していない。朝からこれだけ時間をかけて右端のみ。数にして250ピース。

それでも集中してやった。まあいい。これが毎日の暇潰しになるだろう。



『よし！ 一息入れたら、もう一戦やったらうではないか！ み、見ておれよ仮面○イダー。我が能力見せてくれるわ！』

僕は、マグカップに牛乳を入れてくると、パズルの横に置き、牛乳を飲みながら組み立てを再開した。

虫眼鏡がないと絵が見にくい。虫眼鏡を使うとスピードダウン。無情な現実の中で、僕は無駄なことを考えず、一心不乱にパズルに取り組んだ。

更に3時間が経過し、腹が減ってきた。当たり前か。もう19時だ。今から夕食を作るのは面倒臭さいので、今日はカップラーメンを2個食べることにした。

キッチンの棚からカップラーメンを取り出すと、ポットのお湯を注いで3分待つ。

『そっぴゃあ、昼もラーメンだったな……』

そんな事を考えながら、時間を待った。出来上がったラーメンを一つのドンブリに移し替える。

『うん。いまいち美味そうではないな。そりゃそうだな。昼も夜もラーメンじゃ飽きるっての』

余計な思考は、そこで中断してラーメンを食べると、パズルは一先ず中断して、ドンブリを洗ってから風呂に入<sup>といてもシャワーだが……</sup>った。

風呂から出ると、マグカップに一杯の牛乳を左手に持ち、右手を腰に当てると一気に飲み干す。

『ぶはあー！』

大きく息を吐き出すと、その身体の火照りに少しの間身を任す。

そして、マグカップを洗ってからドンブリも一緒に片付けた。

『さあ！ もう少し頑張るか！？』

僕は、パズルの前に座ると、組み立てを再開した。火照った身体が心地良く、思い込みかもしれないけどスピードアップする。なるべく虫眼鏡を使って。絵と見比べながら。端ピースを組み立てていった。

本当にこれは絵と同じ柄なのだろうか？ そんな疑問に取り付か

れる。それでも、今は絵を頼み綱とするしかない。そんなこんなで、四苦八苦しながら作業を進めいく。

『ぐわあ！ も、もうダメだ！ し、死ぬ……。死んでしまおう！  
目が、目があああ！ きよ、今日のところはこのくらいにしてや  
ろう……。』

目の痛みに耐え切れず、時計に目を向ける。時間も晚くなり、明日は仕事なので今日は止めることにした。

歯を磨き、布団に潜り込むと目を閉じた。ずっと細かいパズルピースを見続けたせいだろうか？ 目の奥がチリチリと痛む。本当ならもっと作業を進めたかったのだが、今日は端ピースの上側と右側のみの完成で終了した。

現在完成ピース数649。残りピース数99351。まだ先は長い……。

### 完成図3（続・枠組み）

20時帰宅。今日の仕事は、思いの外捗った。普段なら見にくい書類の文字が大きく見えるし、サクサク進む業務に心地良さすら覚えた。それもこれも、全てコイツの影響だろうな。

目の前に広がる、上側と右側の端のみが完成した、まだまだ未完のぐちゃぐちゃのパズル。その組み立てを始める前に、仕事の疲れを流しにいく。

『また始まるのか……。悪夢のような死闘が……。考えるな。考えてはならん！心を無にするのじゃ！さすれば、お主の心の眼は開かれるであらう！』

シャワーを浴びながら、気持ちを楽しみにしようと半分ふざけてセリフを考える。自分のセリフに苦笑いしながら、身体を洗う。シャワーから上がると、仕事の帰りにスーパーで購入してきた弁当をレンジで温める。チンッ！と軽い音が聞こえると、レンジから弁当を取り出して食べはじめた。とりあえず、食事中はパズルの事は考えないようにする。

そして弁当を食べ終わると、箸とマグカップを洗ってから、忌ましいジグソーパズルの前に腰を下ろした。

『さあ！今日も頑張るか！と、言ってももう21時だ。少し急がないといけないかな？』

気合いを入れ、残りの端ピースの完成を急いだ。と言いたいところだが、急げる訳がない。書類の文字はよく見えたのに、ピースに書かれた絵柄は殆ど見えない。それでも、出来る限り急いで組み立てを行う。

『うがぁ！見えねえじゃんよ！見えないでゴザルヨ！拙者には、よく見えないでゴジヤルよオ！！』

開始早々壊れ始めた。しかし、買ってしまったからには、完成させないと勿体ない。そんな一途な思いの中、またもや虫眼鏡を使い

ながら組み立てを行った。

パズルの組み立てを開始してから、そろそろ3時間が経過しようとしていた。しかしまだ、下も左も終わらない。一先ず今日は、左端だけを完成させようと、もう少しねばる事にした。

しかし、既に時間は0時を回っている。

『悠長にはしてられないな』

スピードアップする訳ではないが、ふざけるのを中止して作業に取り組む。

【カツ、ツツ、カツ、ツツ、カツ、ツツ、カツ、ツツ】

秒針の音が、やたら鮮明に聞こえる。時計を見るのが怖い。時間を確認したら、すぐにでも眠らないといけない気がして、時計を意識しないようにする。しかし、意識しないようにする時点で、時計を意識してしまっているため、作業の合間に時計の方に目が向きそうになる。

『後少し、後少し頑張ったら寝るから……』

自分自身に言い聞かせるようにして、時間を確認しようとする目を、時計からパズルに戻す。

### 完成図3（続・枠組み）（後書き）

で、ここで力尽きました。

同じような繰り返し……。そして登場人物一人で最後まで……。と  
考えたのですが、甘かった（汗）

日々の出来事に、ドラマはあっても、その一部分だけをカットして、  
ドラマ化するのには、無理があったのか……。私の力量不足か……。

## 理想と現実（案内）（前書き）

介護現場の中身を面白おかしく表現しようと、試みたのですが、次第に難しい話になるため断念。

汚ない・臭い・キツイ・給料安い等と言われる介護現場ですが、楽しい事もあるんです。そして、人と人が直接的に関わる仕事だから、キツイ事を言ったり、言われたりする事だって。

## 理想と現実（案内）

就職難のこのご時世。就職難・就職難と言われるが、求人難の職場がある。それは、老人ホーム。

老人ホームと一言に言っても、【養護老人ホーム】【特別養護老人ホーム】【ケアハウス（旧軽費老人ホーム）】【グループホーム】【有料老人ホーム】【老人保健施設】と様々だ。そんな中で【特別養護老人ホーム】を、ピックアップして話を進めたいと思う。

【特別養護老人ホーム】も大別すると二種類ある。まずは【従来型特別養護老人ホーム】。病院のような総室（多数部屋）のある施設の事である。もう一つが【ユニット型特別養護老人ホーム】。俗称【ユニット施設】と呼ばれる。特徴は、総室が存在せず、個室のみの部屋構造となっている。

そして今から話すのは、従来型特別養護老人ホーム。所謂【特養】の話である。

ここは【社会福祉法人】さんせんかい 山川会【特別養護老人ホーム】ちようじゆそつ 蝶樹荘。  
その特養の【新人教育係】はなしま 花嶋 ろくと 六斗の悪戦苦闘の日々の記録である。

「花嶋君」

突然話し掛けてきたのは、介護主任の米原 まいばら 紀子 のりこ であつた。

「はい？ どうかしましたか？」

振り向き様に応えると、米原主任の傍らに見覚えのない女の子が立っていた。

「今日から勤務する事になった幹先 奈々（みきさき なな）さん。こちらは、新人教育係の花嶋君」

と、突然お互いの紹介をされた。

「はじめまして！ 幹先奈々と言います。これから、よろしく願います！」

「いえ、こちらこそ、よろしく願います」

元気な声で、深く頭を下げ挨拶されたので、こちらもそれに合わせようとおもったが、軽く挨拶するだけに済ませた。

「じゃあ花嶋君、後の事はよろしく！」

米原主任は、僕の肩をポンと軽く叩くと、そのまま去って行った。  
『おいおい主任……。情報は？ この子の経験は？ 年齢は？ どうして何も言わずに行っちゃうかなあ……。』

去りゆく主任の背中を見つめていたが、新人を放っておくわけにもいかなないので、幹先さんの方に向き直った。

「じゃあ幹先さん。こういう所の経験は？」

「無いです」

おもむろに質問してみたが、即答された。

「じゃあ……。何か資格は？」

「無いです」

むむむ。これも即答か……。

「年齢は？」

「十九です」

若いなあ……。

「どうして、こういう所で働こうと思ったの？」

「だって、これから高齢化社会なんですよね？ だったら、一番就職率高いじゃないですか！？」

成る程、それは一理ある。

「それに、今から必要とされる仕事って事は、お給料良さそうだし」「そういう計算か……。この子は、すぐ辞めるな。まあとりあえず、案内してからだな……。』

僕が、そう考えるのには根拠がある。この仕事は予想以上にハードで、そして低賃金なんだ。ハードな部分は慣れれば、どうという事はないが、慣れる事が出来れば……。って話だ。まあ、その辺りに



については、またそのうちふれる。

「じゃあ、幹先さん。まずは、フロアー案内をするよ。僕について来てくれるかい？」

そう言っただけで歩き出すと、幹先さんは「わかりました」と言っただけから、後ろについて来た。

初めに訪れたのは詰め所。一昔前は寮母室と言ったり、最近ではスタッフルームと言ったりする。

その中で、ゆっくりお茶を飲んでいる女性に近付いた。

「長武さん。お疲れ様です」

「ん？ あ、お疲れ様。花嶋君、今日はどうしたの？」

「いえ、今新人の子を案内しているんですよ。あ、幹先さん。この人は二階のフロアーリーダーの長武<sup>ながたけ</sup> 信子<sup>のぶこ</sup>さん」

「で、こちらが新人の幹先奈々さん」

紹介を済ませると、幹先さんが「幹先奈々です。よろしくお願いします！」と頭を下げている。

「こちらこそよろしく」

長武さんは、そう言っただけで僕の手を引き奥の休憩室に招き入れた。

「単刀直入に聞くよ。花嶋君はあの子どう思うの？」

「単刀直入すぎませんか？ まあいいです。そうですね。歳も若く、未経験。資格もない子なので、長くもたないかと……」

「成る程ね。で、今日はどうするの？」

「今日は各フロアーと業務箇所の案内をするつもりです。これが越えられれば、一つステップアップですからね」

「いきなり見せるの？」

「当然でしょう。あの部屋をクリアしないと、継続なんて夢のまた夢ですから」

「それはそうだね」

「じゃ、失礼します」

僕は幹先さんの所へ戻ると、案内の続きを始めた。

「今、僕達がいるのが二階なんですけど、この施設には後、三階と四

階があるんだ。それぞれの居室配置は同じなんだけど、住んでいる人達の状態が異なるんだ。まずこの二階だけど、ここは要介護度の低い人達……。大体、一〇二つてところ。この上の三階は、認知症の人達が多い。認知症は要介護度に反映されにくいので、要介護度二〇三つてところかな。そして四階が、重介護者。寝たきりと呼ばれる事もあるね。移動を車椅子で行う人が多く、自操出来ない。中にはストレッチャーを使用する方もいる。要介護度は四〇五で、少し三の人が混じっているね。って一度に説明したけど、覚えられないよね。また、ぼちぼち覚えたらいいよ。スタッフの紹介もしたいけど、また日を改めてやろうか!? で、これから仕事をする上で重要なポイントを案内するよ。一つは食堂。一つは浴室。そしてもう一つが汚物処理室だね。一カ所一カ所説明しながら案内するからついて来てね」

まず初めに食堂へと案内する。

「ここが食堂だね。大食堂とも言う。入所者百二十名が揃って食事をする所だよ。そして、あっちにあるのが厨房。ここは変わっててね、五階に厨房があるんだ。でも、食堂の隣に厨房が併設されているから、温冷食がきちんと分けられるからいいね。幹先さん。今、食堂は空いているから、ちょっと気になるところなんかを、見てきてごらん。何なら、厨房のスタッフにも挨拶してきたらどうかね」

幹先さんの右隣に立ち、左手を腰に回すと右手を食堂の方へ差し出し、軽くお辞儀をするように、幹先さんを食堂の内部へと誘導した。

幹先さんは、物珍し気に机や椅子等を見ていたが、最後に厨房のカウンター前に行き、中のスタッフに何やら話して、深く頭を下げたと思うと戻ってきた。

「何か聞きたい事は？」

僕の傍まで来た幹先さんに一言掛けたが、少し困ったような顔をしてから、無言で首を横に振った。

「そう? じゃあ、次行こうか!？」

と、また歩き出す。基本エレベーターは使わない。施設内消費電力削減のためだ。老人ホームと聞くと、身体的障がい（障がいの「がい」を仮名で表現している事に疑問がある方もいるかもしれないが、これは障がいの者の人達が提唱した事で、身体的に不自由であっても、他人に害を与えてはいない。というような事から、障がいと表すようになった）があるために、エレベーターを使うのが普通だと思われるが、基本スタッフは階段を使用する。

夏や冬の空調管理も同様で、空間温度が約二十六・七度になるように合わせ、スタッフが暑かろうが寒かろうが、その設定温度を変更する事はない。これもまた、施設内消費電力削減のためだ。基本特養は、スタッフに対してはかなりケチである。

そうこうしている内に、浴室へと到着。ちなみに浴室は一階にある。軽く息を切らす幹先さんを尻目に、浴室の前に立つと幹先さんの方を振り返った。

「今、入浴介助中だから、中に入ったらスタッフへの挨拶や、入所者への挨拶を怠らず、双方に対して失礼のないように。また、入所者の方々にも羞恥心はあるので、あまりジロジロ見ないようにね」

幹先さんが、軽く頷くのを確認してから脱衣室へと入る。

浴室は、脱衣室を中心にして二つの浴室に分かれている。一つは、温泉やスーパ―銭湯等でもお馴染み大浴場。もう一つは、専門的施設でなければ、お目にかかれないような機械浴室。機械浴室にも二通りあり、一つは座位の状態のまま入るリフト型チェアー浴槽。もう一つは、主に座位を維持できない方、所謂寝たきりの方が仰臥位のまま入るストレッチャー型浴槽である。

今日は機械浴の日であったため、幹先さんをまず、大浴場へと誘導した。

「ここで皆さん、一人でお風呂に入るんですか？」

何か質問しなければ……。と思ったのか、突然声を掛けられた。

「自分自身で全身を洗われる方は、極少人数だね。基本、自力で出来る事は御自身でやってもらうけど、どこか、若しくは全身の洗身

介助を必要とされる方が殆どだね。また、浴室は施設内で最も危険な所なので、一番注意が必要な場所となっている。何故一番危険な所かと言うと、まず裸になるから。身を守る物が無くなるからだね。次に、下が硬いタイルだから。転倒などとすると、即骨折・裂傷に繋がるからね。そして、浴槽内は浮力がかかるから。溺れる可能性があるからね。これで、大体分かった？」

神妙な面持ちのまま、幹さんは軽く頷いた。それを確認すると、次に機械浴室へと移動する。

初めて見る光景に、啞然とし、声も出ないようなので、軽く説明する。

「機械浴室は、スタッフが操作するので、一見安全に見える。でも実は、機械からの転落や、機械の隙間に挟み込み等の事故が多く、一般浴……ああ、大浴場よりも事故が多いんだ。だから、一般浴を行うよりもスタッフは神経を張り詰めている。だから、そろそろ行こうか!？」

さっきよりも更に神妙な面持ちで、何度も頷く幹さんを連れて、浴室を後にした。浴室を出ると、一度浴室内に僕だけが戻り、「ごめんね」とだけ言っておいた。

「さあ、最後に案内するのは、この仕事をするのに避けて通れない部屋になる。この部屋に入れないと、介護の仕事が出来ないと言っても過言ではない。うん。時間的にもいい時間だね。じゃあ、行こうか!？」

そう言って四階へ案内する。タイミング良く、オムツカートが戻ってきた。

「ここが汚物処理室。オムツ交換を終えた汚染紙オムツを処理して、せいしき清拭……お尻拭きを洗う所だよ」

そう言ってスタッフが汚染オムツを袋に詰めたり、清拭を水洗いしているところへ連れていく。

今日は、普段より腸の調子良かったのか、汚物室の中は排便臭で満たされていた。

幹先さんを見ると、臭いに堪えられないのか、顔をしかめ口を手で覆っている。

「ちなみに、排泄物は入所者の健康状態を把握するために、最も重要な情報源なんだ。色・形状・臭い色んな要素を確認出来る。幹先さん！ 手！ 失礼だよ！」

幹先さんは、注意を受けゆつくりと手を口元から離れた。しかし、息を止めているようだ。

「紙オムツは産業廃棄物といって、普通のゴミとして処理出来ない。オムツの中に入っているポリマーが、それに当たるんだ。昔は違ってたんだけどね。一昔前までは、布オムツを使用していたからね」

僕は少し意地悪に、ゆつくりと説明した。幹先さんは、呼吸が苦しくなってきたのか、真つ赤な顔をしながら頷いていたが、突然汚物処理室から飛び出して行ってしまった。

僕は、ゆつくり汚物室から出ると、幹先さんに近付いた。

「じゃあ、今日は少し早いけど、後は米原主任のところへ行つて質問とかあつたらしておいで」

そう言つて「お疲れ様」と付け加えた。

幹先さんは「今日はありがとうございました。お疲れ様でした」と言つて、フラフラとした足取りで去つて行った。

『さあ、彼女……明日来るかな……？』

翌日、幹先さんは無断欠勤した。施設長が直接電話したが、辞めさせて欲しいと言われたそうだ。

仕方ないやね。綺麗なイメージだけでは務まらないんだよ。

「花嶋君。やつぱり辞めた？ あの子」

長武さんにそう言われたので、「仕方ないですね。昨日、汚物室……かなりきつかったみたいです……」と言つと、「そう」と言つて去つて行った。

さあ！ 心機一転！ 僕も今日の業務頑張ろうかな！！



## 理想と現実（実習）

幹先さんが辞めてから、また就職者はいなくなった。数名の面接を行っている事は知っていたが、全て米原主任がカットしているようだった。

『主任……、今度はある程度施設内容を把握している人をお願いしますよ』

で、今日は新人教育ではない。今日は、ヘルパー二級実習の日なのだ。

朝の朝礼の後、僕は主任に呼び出され、一人の実習生の対応をする事になった。

実習生の名前は、武田<sup>たけだ</sup> 邦一<sup>くにかず</sup>さん。四十六歳のオッサンだ。前に働いていた会社では、それなりに価値のある地位にいたらしく、謙虚さが無い。態度が横暴で、偉そうにしている。実習生としての自覚が無いのか、僕に対して部下に接するように対応してくる。

『さて、このオッサンにどこから教えればいいかな……』

僕の配属は、基本三階。認知症の入所者のフロアーだ。

主任に武田さんを紹介されてから、三階に上がる。

「熊谷さん。おはようございます!」

まずは詰め所に入り挨拶する。この人は、熊谷<sup>くまがや</sup> 保子<sup>やすこ</sup>さん。三階のフロアーリーダーだ。

「おはよう。ん？ 花嶋君、今日は先生？」

武田さんを見付けた熊谷さんが、聞いてくる。僕は思わず武田さんを見たが、武田さんは挨拶する素振りも無く、じっとしている。

「武田さん! まずは挨拶してください!」

武田さんを睨みつけ、挨拶を促す。

「けど、この人俺よりも年下でしょ! どうして年上の俺から挨拶しないといけないんですか?」

『ダメだわ……この人』

そう思つて、熊谷さんに向かつて軽くお辞儀をすると、詰め所を出た。

『まずは……つと、トイレ誘導かな？』

と、武田さんを連れて、一人の入所者のところに行く。

「荒笠さん。おはようございます」

この方は、荒笠 あらがさ たもつ 保さん。七十二歳のおじいちゃん、アルツハイマー型認知症を患い、今では自分や家族の名前どころか、言葉すらも忘れてしまっている。身体的障がいとは殆ど無く、自力歩行可能だが、当人に行動の意欲がなく、放っておくと朝から晩まで座り続けている。そのため、定時毎のトイレ誘導では、必ず声を掛けトイレまで案内するのだ。

僕は武田さんに、荒笠さんの誘導をお願いした。武田さんは、椅子に腰掛けたままの荒笠さんに近付くと、目の前から立つたまま、手を差し出した。

「はい！ 立つてよ！ トイレ！」

その言動に僕はカチンときた。

「ちよつと、武田さん！ あなた、一体何処で何を習ってきたんですか！？ 年寄りと話す時は、目線を合わせるか、それよりも下から話すのが基本です！ それに、介護はしてやってるのではない！ させていたでいるの精神が重要なんです！」

「荒笠さん。おトイレ行きましようか？ じゃあ立ちますよ。せーの！」

僕は、荒笠さんの前に屈み込むと、荒笠さんに優しく声を掛け、手を軽く引いて立ち上がった。

「おいおい、花嶋君よ。それなら、初めからそう言ってくれないと」「あなたに【君】で呼ばれる筋合いはありません。しかも、上から目線で話される筋合いもあります。今回はスルーさせていただきますが、態度を改めなければ、あなたの実習を強制終了しますよ。よく考えて話してくださいね」



荒笠さんをトイレに案内しながら、武田さんに注意、いや警告を行った。

『これで変われば、いいんだけど……』

昼食介助時になって、僕はエプロンを着用すると武田さんにエプロンを着けて食堂へ来るように指示した。

しかし、食堂に現れた武田さんは、エプロンを着けていなかった。

「武田さん。僕の言った事、聞いてました？」

「ああ。聞いてたよ。エプロンなんて前掛けは、キッチンに立つ女がする物だ。だから、俺が着ける必要はない！」

悪びれる訳でもなく、真顔で答える武田さんに怒りを通り越し、呆れてしまった。

「あの……ですね、武田さん。エプロンは最低限の衛生管理を目的として必要な物です。本来ならば、手袋とマスクの着用も必要なのですが、それらをする事により、入所者の皆様に不快な思いをさせないように省略しています。実習にあたって必要な物の中に、エプロン書いてありましたよね。今すぐ取って来てもらえますか！？」

なるべく優しく説明して、僕は先に食堂に入った。

暫く待つと、武田さんがエプロンを着けて戻ってきた。その光景を見て、笑ってはいけなくのだけど、笑いを堪える事が出来なかった。武田さんが着けて来たエプロン。それは子供向けのキラキラが一面に無数プリントされた、それはそれは可愛いらしいエプロンだった。

「仕方ないだろ。娘のを借りてきたんだ」

恥ずかしそうに話す武田さんに、少し親近感すら覚えたのだった。食事介助は、実習生には行わせない。基本、見学実習だけだ。何故かと言うと、嚥下確認をしつかり行わないと、誤嚥による誤嚥性肺炎や、窒息死を引き起こしたりするからだ。

「じゃあ、武田さん。僕はこの方の食事介助を行いますので、武田さんは、自力で食べられる方・介助にて食べている方を見学してく

ださい」

そう言って食事介助を始めた。

暫くして、武田さんの姿が見えない事に気が付いた。

『まさか勝手に介助してるんじゃないだろうな！』

嫌な思いが脳内を駆け巡り、食堂内を見渡してみたがやはりない。

『何処に行ったんだ！？ あの人は！』

溜め息をつきながら窓の方を見た。その瞬間！ 僕は目を疑った。食堂の外のベランダに出て、優雅に紫煙をあげている武田さんを発見したからだった。

『クソッ！ あのオッサン！』

食事介助中のため、離れられないのをいい事に、武田のオッサンは、こちらに気付かれているのを知らないかのように、二本目のタバコに火をつけた。

「花嶋君。行つていいよ」

「ありがとうございます。よろしく願います！」

状況をいち早く把握して、僕に声を掛けてくれた熊谷さんに、お礼を言つと、僕はベランダへと早足で歩いて行つた。

「ちよつと！ 武田さん！」

外へ出て大声を出すと、武田さんは右手を軽く挙げただけだった。ますます腹が立ち、自分でも分かるくらいドスドスと歩く音を出していた。

「あなた何してるんですか！？」

「ちよつと一服してただけだよ。そんなに目くじらたてなくてもいいじゃない」

「あなた、自分の立場分かってます！？」

「分かつてるよ。俺が実習生で、花嶋君が俺の先生だよな」

真顔で答える武田のオッサンに、我慢の限界を超えた僕は、「ちよつと来てもらえますか！？」と武田のオッサンを引っ張って行つた。

「栗山主任！　すみません！　この方、強制終了してください！」  
僕は事務所に入ると、中にいた中年のオヤジ。栗山くりやま　正隆まさたかさんに声を掛けた。栗山さんは、主任相談員で、実習生の統括を行っている。

「どうしたんだい？」

少しおとりした口調の栗山主任だったが、僕の表情を見ると「ちよつと来て」と別室に武田さんと共に案内した。

「で……、その武田さんのどこがいけなかったのかな？」

栗山主任が真剣な眼差しで聞いてくる。

「実習生としての態度です！」

「ふむ。態度つてどんな？」

「まず、挨拶が出来ない。年寄りに対して上から目線で、命令的。業務指示に従わず反抗的。勝手な判断での、休憩実施。もう、目に余る事ばかりです。こんな事を本人の前で言うのは何ですが、過去のしがらみを一旦、整理してから再実習した方が良いと思います！」

落ち着いた表情で、僕の話聞いていた栗山主任は、話を聞き終えると、武田さんの方を向き「で、如何ですか？」と質問した。

「俺は悪い事してないよ。年長者へは、年下から挨拶するのが通りだし、エプロンの必要性も今日初めて知った。タバコを吸いたい時に吸って何か悪いかい？」

その言葉を聞いた栗山主任は、僕に退室するようにすすめた。

その後、栗山主任と米原主任・武田さんの三人で話をし、態度を改める様子のない武田さんは、ヘルパー養成講座の責任施設へ連絡され、業務途中にて強制終了となった。

彼の悪かった点は、ただ一つ。過去の地位を捨てきれず、ズルズルと引きずった揚げ句、実習生と実習を受ける施設スタッフとの上下関係を把握出来なかった事だ。新人や実習生は、年功序列ではない。少し考えれば分かる通り、実習生や新人は、いつでも最下層のポジションに位置するのだ。

「とんでもない人に当たったね」

熊谷さんにそう言われたが、僕は黙って頷くしかなかった。

後日、武田さんの通うヘルパー養成講座の施設より連絡があり、武田さんの再実習を行う事になった。

担当は、勿論……僕。

武田さんは、初め、恨めしそうに僕を見ていたが、一つ武田さんに教えてあげると納得したようだった。

教えた内容とは……、何故【実習の強制終了が存在するのか】という事だ。基本、施設は実習生より実習代金を受け取り実習期間の教育を行うのだが、これにより、実習強制終了をしない施設も確かに存在する。しかし、この施設のように強制終了を実施している施設も多数存在する。それは何故か？ それは、実習生が実習を受けた施設は、その実習生にとっては実務訓練所のような物で、資格取得後の就職先で「何処の施設に実習行つたの？」と聞かれると、その実習生の善し悪しに関わらず、施設の名前が出てしまうからだ。まあ、言ってしまうえば、施設間での世間体といったところだ。だから、態度の悪い・物分かりの悪い実習生等に関しては、【強制終了】【再実習】等の処置がとられる。

この話をして、「もし武田さんが以前勤めていた会社に来た研修生が、態度が悪く、物覚えが悪かったらどうしますか？ たいして何も分かっていないのに、分かったような顔をして、別の会社に就職され、あなたのいた会社で学んだと言われたら、どうしますか？」と質問すると、「それは出来ん！ そんな奴を野放しにする事など、言語道断だ！」と言葉が返ってきた。

そこで初めて、気が付いたのか「先日はすみませんでした」と、頭を下げていた。

それから二日間、武田さんにとってはどうか分からないが、施設にとっては有意義な実習を行った。直接介護に関しては、基本見学実習を行い。間接介護には、率先して取り組んでもらった。業務の

合間・休憩時間・業務終了後を利用し、武田さんからの質問にも答え、細かい説明も行った。

ある意味、今回の武田さんの実習は、再実習になって良かったと僕は思う。あの時、あのまま、横暴な武田さんが実習を終えていれば、武田さんのためにもならなかったであろうから。

武田さんも似たような事を思ったのか、最終日、特養実習ではなくデイサービス実習だったにもかかわらず、栗山主任・米原主任・熊谷さん、それと僕を探して、一人一人に「お世話になりました。ありがとうございます」と深々と頭を下げて行った。

『おいおい。シャバに出所する犯罪者じゃないんだから……』

と、ふと思ったが、気持ちが通じたようで良かったと胸を撫で下ろした。

武田さんが、実習を終了してから米原主任に聞いて知った事なのだが、武田さんの再実習の担当を僕にしたのは、他でもない、武田さん本人たつての希望だったそうだ。

『ふう！ 可愛い女の子に好かれるなら良いけど、オッサンに好かれてもねえ……』

と、思ったのは、胸にしまっておこう。

## 理想と現実（理念）

介護を生業とするスタッフに多く見られる事だが、彼等・彼女等には【介護理念】もとい【介護方針】が個々に存在する。

ある程度、施設介護に慣れたスタッフであれば、現実離れた理念（いや、ここでは敢えて【理想】と言おう）を抱きはしないのだが、施設介護の経験が浅いスタッフ達は違っんだ。

介護現場の入所者と介護スタッフの比率は三：一。蝶樹荘で、その比率を計算すると、入所者が百二十名のため、百二十を三で割ると四十となる。この四十名という数が、介護従事スタッフの総数となる。

介護従事スタッフと表現したのには理由があり、常勤スタッフと非常勤スタッフを合計で換算し、直接介護に関わらない洗濯場や掃除専門のスタッフも、この数の中に入る。

それから計算すると、特養で実質介護を行うスタッフは、三十六名程で各フロアーに振り分けると、一フロアー十二名となる。

そして常勤スタッフは一月、公休数が八回。非常勤スタッフは、個人により無制限。そこから平日の日中の出勤者数を割り出すと、一フロアー約五名程度。これに夜勤入りのスタッフと、明けのスタッフが組み込まれ、一日の出勤スタッフの総数となる。

しかし、日中の出勤スタッフが五名でも、入浴介助スタッフを各フロアーが二名ずつ出す必要があるため、実質フロアーに残るのは三名程度。

一フロアーに四十名の入所者が存在するため、スタッフ一人当たり十数名の入所者が割り振られる事になる。

そして、スタッフ不足の現状を抱える施設では、公休数を減らす事により、その勤務体制を整えているのだ。

奥長 おくなが 新二君 しんじ、今年二年目の未熟介護士だ。奥長君の理想は「アットホームな施設介護」なのだが、これは新人の多くが抱く「現実を大きく逸脱した介護理念」なのだ。

「熊谷さん。鈴野さんのADL（日常生活動作）が、最近落ちてきている気がするのですが、どうでしょう？」

鈴野さん すずの というのは、八十三歳のおばあちゃんの事で、フルネームを鈴野 はなえ 花枝さんという。ADLは、移動は車椅子自操で、食事は自歯が少なく刻み食で、自力摂取。排泄感覚は薄いが、立位可能なため紙パンツと尿取りパットを併用し、トイレ誘導を行っている。入浴は安全面を考慮し、リフト浴を実施。洗身は、右半身麻痺があるため、介助洗身を行っている。

七十一歳の時に左脳の脳梗塞を患い、病状回復・退院後、右半身麻痺が残ったのだ。その時に老人性認知症（脳血管性認知症）を発症し、現在に至るのである。

「奥長君。鈴野さんのADLの事だけど、あれはね仕方ない事なの」「仕方ないって、どういう事ですか!？」

「加齢に伴うADLの後退。そう言って分かるかしら？」

「でも! 日常訓練等によりADLを向上させる事も、介護福祉士の仕事ですよ!？」

「奥長君。障がい者ならまだしも、お年寄りだね、加齢に伴ってADLが著しく低下するの。だから、ADLの向上ではなく現状維持を遂行する事が重要視されるの。わかる？」

「それはわかります。けど!」

「けれど、何? 少ないスタッフ人数で、これだけの入所者の介護をしながら、他のスタッフに無理を言つてまで、個人のADLを重視しなければならぬ? そうする事によつて、何か良い事がある? 本人がそれを望んでいるかも分からないし、多忙な業務の中に新たな業務を練り込む、しかも全体への援助ではなく、個別援助でこれを周りのスタッフ達はOKするかしら?」

「じゃあ、どうしたらいいんですか!？」

「どうもこうもしないわ。入所者全員の身体状態を維持しつつ、健康管理を怠らない。その中で、『ここにいて良かった』『楽しい人生だった』と感じてもらう事。それに誠心誠意尽くすの。それが介護士に課せられた業務なの。業務とは、仕事だけど仕事じゃないの。日常生活の補佐的動作なのよ。それを忘れずにいてちょうだい」

奥長君は、それ以上何も言わなかった。ただ無言で頷きながら、熊谷さんの話を聞いていた。たぶん、言わなかったのではなく、言えなかったのだと思う。

彼が理念とする【アットホームな介護】、これはただの理想にすぎない。

たぶん現代の介護現場の状況を改善しない限り未来永劫変わる事のない問題だ。

アットホーム。これは抽象的に【家族のような】と解釈しやすい。しかし、入所者にとって家族は、息子や娘夫婦とその孫・配偶者を指し、介護士は【お手伝いさん】的見方をされる。



## 理想と現実（理念）（後書き）

そしてこれも、こんなに早く断念。

話を紡ぐのは、本当に難しいです。

自分が、接していた事だけに、多少は簡単に書けるかと思っていましたが、なかなか難しいですね。

でも、この話はもう少し考えて、きっちり纏めてから、もう一度トライしてみたいとも思っています。

## 勇者を探して【旅立ち】（前書き）

ゲーム仕立てのファンタジーを、書こうと思って書きはじめたこの作品。

初めはノリノリで書いていましたが、途中で読み返してみた途端、ゲンナリしてしまい、書き直す気力も湧かなかった。

全てにおいて、描写がイマイチ。

## 勇者を探して【旅立ち】

俺達は今、旅の途中だ。

世界を暗黒で包み込んだ魔王を倒すため、世界各地を巡り、勇者というヤツを探しているんだ。

ことの始まりは簡単だった。

俺達の村の、占い師兼薬剤師兼嘘つきの村長が、俺達四人を捕まえて言ったんだ。

「今、世界には、魔王という邪悪な存在が、民の生活を脅かしている。お前ら悪ガキは、村にいても、害虫とたいして変わらない。よって、勇者を探して旅立て。勇者の特徴は、耳が長くて、目が青く、髪の色は白銀で、豚鼻をした身長140cmのチンチクリン。魔法を使って、剣の腕も凄いとしておく」

イマイチ納得出来ない話だったが、その日を境に、村人の態度が急変し、俺達四人は、村を追い出されるようにして、冒険に旅立ったんだ。

『しかし、どうして俺達の親まで、みんなと同じように、追い出したんだろっ』

そうして旅は、始まった。まずは、隣の町で装備を揃えなければいけない。この村人からくすねてきた金で。

隣町までは、徒歩10000歩といたって近い。俺達は、町に入ると一目散に武具店に飛び込んだ。

「はい、いらっしやい。兄ちゃん達、まずはギルド証を見せてくれるかい」

「何？ ギルド証って？」

「ギルド証がないと、武具は売れないよ。もし冒険者として、武具が必要であれば、まずはギルドに冒険者登録してくることだね」

武具店の店員は、冷やかしの客かと言わんばかりに、大きくため

息をつく、手で追い払った。

「なんだよ……、冒険者ギルドって……」

「そんなの、俺が知るわけないだろ!？」

「ねえねえ、あれ何だろ？ 風船浮いてるよ。風船」

「どこにあるのかしら？ ギルドって」

「ねえねえ、風船浮いてるよ」

「冒険者ギルドか……。ちょっと町の中を、うろろろしてみっか!？」

「風船浮いてるよ。風船がフワフワしてるよ」

約一名の集中力が、既に切れかけていたが、俺達は冒険者ギルドを探して、そんなに広くない町の中を探索した。

武具店から道なりに、東に進んだ所にそれはあった。

「そう、ここ！ 風船が浮かんでる!」

「だ〜!! ノピノプ！ 風船風船うるさい!」

でも、よく見ると、確かに風船の数が尋常でない。

「あの風船、くれないのかなあ……」

少しやり切れない気持ちで、ギルドの中に入ってみた。ノピノプ

だけは、能天気だったが。

「お、兄ちゃん達、冒険者登録かい？」

ギルドに入るや否や、受付のイカツイオッサンが話し掛けてきた。俺達が、互いの顔を見ながら、軽く頷くと、「四名様ご案内〜い

!」と、楽しそうに言つと、店の奥へと通された。

「あらあらあら。若い冒険者さんだこと。じゃあ、今からやつてもらふ事の、説明をするわね」

受付の隣の部屋で待っていると、化粧の厚いオバハンが話し掛けてきた。

「今から坊や達には、冒険者分別用の試験を受けてもらふわね。試験といつても、学力テストなんかじゃなくて、身体能力テストと、少しの解読テストだから安心してね。その結果によって、坊や達の今の職業が決まるわよ。だから、真剣に頑張つてね〜」

そのまま、有無を言わず、重量上げや持久走。動態視力テストや、速読テスト等を、嫌になるまでさせられた。

全てのテストを終え、グッタリとオバハンの部屋で倒れていると、受付のオッサンの呼ぶ声が聞こえた。

「兄ちゃん達の結果、出たよ。今から一人ずつ発表していくから、発表された人は、このギルド証を受け取ってね」

慌てて受付に行くと、オッサンがやけに馴れ馴れしく話し掛けてくる。しかし俺達はどうすることも出来ず、ただオッサンの言葉を待つしかなかった。

「それでは一人目！ パパパ・ンパ・ペペン君！」

名前を呼ばれた俺は、無意識に「はい！！」と返事をして、オッサンに近付いた。

「パパパ君は……。筋力20点・速さ10点・判断力5点・知識1点で、……………悪ガキに認定されました！」

「ちょっと待てよ！ 職業【悪ガキ】ってなんだよ！ ありえねえだろ！」

文句を言う俺を他所に、オッサンはギルド証を差し出している。

『クソッ！ 職業【悪ガキ】って何だよ！』

気に入らなかったが、仲間がニヤニヤしながら後ろから突くので、仕方なしにギルド証を受け取った。

「パパパ最高じゃん！ 職業【悪ガキ】笑える〜！ 既にネタ。冒険が始まる前からネタだよ！ 流っ石パパパ！」

ニコムリンは、面白そうに俺をからかっていたが、名前を呼ばれると、「俺は戦士か盗賊か？ 悪ガキ以下なんてないだろ〜！」と吐き捨ててから、オッサンの所へ向かって行った。

「はい！ それでは二人目！ ニコムリン・ヨボヨボ・フリフリン君。君は……。筋力10点・速さ15点・判断力2点・知識・20点で、……………パシリに認定されました！」

「はいい！？ 職業【パシリ】って、冗談じゃねえぞ！ どうして俺が、パパパよりも下なんだよ！ 職業【パシリ】って何だよ！

説明しろよ！ おいオッサン、それしまえよ！ しまえつつつてんだろ！！ 受け取らねえぞ！ そんなギルド証、いらねえ！」

喚き散らすニコムリンをオッサンから引き離し、オッサンからギルド証を受け取った俺は、ニコムリンに近付いて「パシリ」と、一言だけ言って胸元に置いてやった。

「それでは三人目！ ノピノプ・ボポン・アイヤーン君！」

名前を呼ばれたノピノプは、嬉しそうに立ち上がると、スキップしながらオッサンへと近付いた。

『アイツ。俺達の職業、聞いてなかったのかよ……』

「それではノピノプ君は……、筋力30点・速さ10点・判断力15点・知識10点で、……戦士に認定されました！」

「はい！ ありがとうございます！」

ノピノプは、普通にギルド証を受け取ると、俺達のところに戻ってきた。

「って、納得出来るかあ！」

「そうだ！ どうしてノピノプが戦士なのに、俺とパパパが、【パシリ】と【悪ガキ】なんだよ！」

「ノピノプ！ どんな裏技使った！？」

「金か！？ やっぱり世の中金か！？」

「はいはい。そこまでね。じゃあ私、名前呼ばれたみたいだから、行ってくるね」

ノピノプに掴み掛かる、俺とニコムリンを引き離すと、サラはオッサンのところまで行った。

「それでは最後だね。四人目！ サラ・デ・リーリアさんは……、おお！！ これは凄い！ 筋力75点・速さ60点・判断力80点・知識150点で、……WMマスターに認定されました！ お嬢ちゃん凄いねえ！」

「あの……、すみません……。WMマスターって……何ですか？」

茫然と立ちすくむ俺達を他所に、サラはオッサンに質問している。「お嬢ちゃん知らないのかい！？ WMマスターってのは、戦士系

職業のTOP、ウォーリアと、マジック系職業のTOP、Mマスターをどちらも兼ね備えた最高峰の職業のことだよ。……ギルドに初めての登録で、こんな職業になる人なんて滅多としないから、お嬢ちゃん本当に凄いよ。あの兄ちゃん達を、しっかり守ってやりな！はい、これプレゼント。初級の魔導書だよ。アタック系マジックと、ヒーリング系マジックの基礎が書いてあるから、よく読んでおいてね。初級以降のマジックについては、魔導書店で購入する手もあるけど、閃きで身につけるって方法もあるから、頑張ってね」

「どうしてサラが……」

「納得いか〜ん！」

「サラちゃん凄〜い！サラちゃんがリーダーだね！」

最後の聞き捨てならない言葉に、ニコムリンと俺が、ノピノプにぶちギレたのは、言うまでもない……。

ところ変わって、またもや武具店。

「兄ちゃん達、ギルドへ行ってきたのかい？　じゃあ、ワシも商売始めようかな。で、誰から買っんだい」

俺が初めに店員の前に立ち、ギルド証をカウンターの上に置く。

「ふ〜ん。悪ガキい！？　じゃあ、これしかないな。短い金属棒と青いオーバーオール。合わせて100Gだな」

「なんだよそれ！　もっと強そうなヤツいっぱいあるだろ！」

「すまんなあ兄ちゃん。悪ガキには、悪ガキ専用の武具しか、売ることが出来ないんだ。気に入らないのなら、強くなって、もう一度審査を受けてみな！　で、買うの！？　買わないの！？」

そこまで言われたら、買うしかない。仕方がないが、その武具？　で我慢することにした。それでも、ニコムリンよりはマシだった  
が……。

ニコムリンの職業は、【パシリ】。出てきた武具？　は、ペーパーナイフと赤い体操ジャージ。合わせて50G。笑ったらいけないとは思いつつ、爆笑してしまった。ニコムリンは、半ギレだったが、

何も言わなかった。

ノピノプは戦士らしく、鉄の剣と皮の鎧を購入した。ただ、納得がいかないのは、どうして鉄の剣と皮の鎧のセットが80Gだ！  
って事だ。俺の軟弱武具？ よりも安いじゃねえか！！

サラの職業は、高Lv・過ぎるらしく、職業に合った武具を買う事は、出来なかった。

それでも、俺達の中で一番高額の1500Gを支払い、鉄の杖と鉄の盾、鉄の鎧に鉄の兜と鉄のブーツを購入した。

金が一気に無くなってしまったのだが……。

店を去ろうとした時、店員に呼び止められた。

「おいおい、兄ちゃん達忘れ物だよ！」

と突然手渡された四角い箱。

「何だこれ？」

不感懐いっぱいに、いろんな角度から、箱を眺めてみる。

「それは、冒険者御用達Lv・Upカウンター。モンスターなんかと戦って、強くなった？ って頃に音がなる。しかも、ギルドで判定した君達的能力が、見れるって代物だ。プレゼントだから、持っていくな！」

店員の説明は、ちんぷんかんぷんだったが、タダで貰えるらしいので、一応貰っておく事にした。

『さあ！ 勇者を探す冒険の始まりだ！！』

パパパ：悪ガキLv・1【攻撃力10 防御力5 速さ5 魔法攻撃力15 魔法防御力15 生命力60 魔法力0】

ニコムリン：パシリLv・1【攻撃力8 防御力2 速さ10 魔法攻撃力0 魔法防御力0 生命力50 魔法力0】

ノピノプ：戦士Lv・1【攻撃力30 防御力25 速さ10



魔法攻撃力0 魔法防御力20 生命力100 魔法力0】

サラ：WMマスターLv.1【攻撃力65 防御力50 速さ3  
5 魔法攻撃力75 魔法防御力55 生命力350 魔法力14  
0】

『なんなんだ！ 同じLv.で、この強さの差は、よ！！ あゝあゝ  
マジやってらんねえ！』

## 勇者を探して2【初めての戦闘】

とりあえず、勇者を探すという、途方もなくデカイ目的を掲げて町を出発した俺達だったが、この先どこへ行けばいいのか、全くわからなかった。

「パパパ。このまま、まっすぐでいいのかよ」

「わからん」

「ねえパパパあ。あそこに、お花咲いてるよ」

「そうだな」

「ねえパパパ。一度町に戻った方が良くない？ 闇雲に進んでも、どうしようもないよ」

「やっぱ、そう思うか？」

「おいパパパ、向こうに何か見えるぞ」

「何が見えるんだ？」

「ねえパパパあ。蝶々飛んでるよあ」

「はいはい。わかったわかった」

「パパパ。このまま、どこまで行くの？」

「町、戻るか？」

「なあパパパ……「あゝ！！」うっせえよ！ さっきから聞いてりやパパパ、パパパ言いやがって！ どうして、俺にばっか聞くんだよ！」」

行き先もわからず、とりあえず進むしかない俺に、自分で何も考えないコイツらは、質問攻めをしてくる。そんなコイツらに、俺はキレてしまった。

「な！ テメエがリーダーやるつつただろうが！」

「パパパ、統率能力なし」

「パパパじゃ、そんなトコでしょうね」

「行き先決めんのが、リーダーじゃねえのかよ！」

「ニコムリン、パパパにそんな難しい事言っても無駄よ」

「ねえねえ、大きな蝸牛い」

黙っていれば、コイツら、言いたい放題言いやがって！

「このまま、パパパにリーダー任せてていいのかよ!?」

「大きな蝸牛、近付いてくるよお」

「ひとまず、町に戻って情報収集をしましょうか」

「わあ！ 蝸牛、おつきい!!」

「テメエら、さっきから聞いてりや、好き勝手言いやがって!」

… っ てノピノプ、蝸牛って何だ？」

ノピノプが見詰める先の景色に視線を向けると、そこには俺達の3倍のデカさはある、巨大な蝸牛が接近していた。

「モ、モンスターだあ!」

「なんじゃこりゃあ! デカ過ぎるだろ!」

「これは、ジャイアントマイマイね。雑魚よ雑魚」

「おつきい蝸牛、何食べるのかなあ?」

「仕方ねえ! 戦闘開始だ!」

「よっしゃあ! パシリ脱出だ!」

バトルに勝利すれば、経験が入り、Lv. がUpすると、考えた俺達は、即座に戦闘体制に入った。のだが、何だか人数が足りない気がする。

辺りを見渡すと、ノピノプとサラが、バトル範囲から離脱していた。

「テメエら、何してやがる! 戦わねえか!! 雑魚って言ったのは、誰だよ!」

「ノピノプ! サラ! テメエらが、戦わねえと、悪ガキとパシリから、なかなか抜け出せねえじゃねえか!」

「蝸牛、可哀相だよ。きつと、痛い痛い言っちゃうよお……」

「わ、私、動物と昆虫は、パスだからね!」

どれだけ怒鳴り散らしても、二人は動こうとしない

仕方がないので、ニコムリンと二人でバトルすることにした。

ジャイアントマイマイの動きは、ウスノ口で、俺達二人でも全く

攻撃を受ける事はなかったが、その殻の硬さは、ハンパなかった。ニコムリンの武器はペーパーナイフ。殻をどれだけ突いても、殻に傷一つ付ける事すら出来ない。

結局、俺がなんとかしないといけないのか。

ひとまず、短い金属棒でハンパなく硬い殻を殴り続ける。

ヒビ一つ入らないくせに、手が痛くなってきたやがった。

気が付けば、殻にはダメージを与えられないニコムリンが、柔らかい部分を突きまくっている。

それが本当に、ダメージに繋がっているのかは、不安になるところだが……。

ジャイアントマイマイはと言うと、俺達二人を追いつけて、ぐるぐると回り続けている。

回るマイマイ。殴る俺。突くニコムリン。その果てしない攻防？は、気が遠くなるような時間を要した。

マイマイの一方所の殻が、ゴボツと音をたてて粉碎した瞬間、マイマイの体が穴より流れ出てきたかと思うと、マイマイは動かなくなった。

「勝った……のか」

「よっしゃあ！ 勝ったぜ！」

流れ出していくマイマイを眺めている時だった。ポンポンピリリン。ポンププリンと音が鳴っているのが、聞こえた。

慌ててLv・Upカウンターを取り出す。

（【パパパ・ンパ・ペペンペン】は、Lv・が【2】になった。気分的に、強くなった気がする。【パパパ・ンパ・ペペンペン】は、Lv・が【3】になった。攻撃力が、上がったと思い込め。【パパパ・ンパ・ペペンペン】は、Lv・が【4】になった。生命力が5アップした）

（【ニコムリン・ヨボヨボ・フリフリリン】は、Lv・が【2】になった。土下座が上手くなった。【ニコムリン・ヨボヨボ・フリフリリン】は、Lv・が【3】になった。攻撃力が1アップした。【ニコ

ムリン・ヨボヨボ・フリフリリン」は、Lv. が【4】になった。口が少し悪くなった。【ニコムリン・ヨボヨボ・フリフリリン」は、Lv. が【5】になった。防御力が1アップした）  
（【ノピノブ・ボボン・アイヤーン」は、Lv. が【2】になった。攻撃力が2、防御力が1、速さが1、生命力が15アップした）  
（【サラ・デ・リーリア」は、Lv. が【2】になった。攻撃力が3、防御力が1、速さが2、生命力が20、魔法力が10アップした）

Lv. Upカウンターは、音と同時に、自動音声で能力の向上を告げていく。

「ちよつと待て！　どういう事だ！　攻撃力が、上がったと思い込めって何だ！？　上がってねえのかよ！」

「てか、Lv. 上がったただけなのかよ！」

「蝸牛、死んじやった……。痛い痛い言っつて、死んじやったよお。

可哀相……蝸牛」

「さ、終わったなら町に行くわよ」

「ちよつと待て！　どうして、テメエらだけ強くなってるんだ！」

「そうだ！　戦ってねえじゃねえか！！　じゃねえよ！　土下座が上手くなつてどうすんだよ！！　もう意味がわかんねえよ！」

「はいはい。文句があるなら、自分の職業に言っつね。さあ、町で情報収集よ！」

「ゴメンね……蝸牛。今度生まれて……ねえねえ、ワンワンが走ってくるよお。ワンワン、可愛いね」

「ワンワン？　うわあ！　ポイズンウルフだ！　逃げろ！！」

「いきなり死ぬのは、嫌だあゝ！」

「ワンワン、走るの速いねえ！。ワンワン、バイバゝイ」

俺達は、全速力で走ると、町へ逃げ込んだ。

いつの間にか、やり切れない気持ちには、どこかに消えてしまっていた。

「とりあえず、今日は宿屋に泊まるか？」

「そうね。じゃあ、情報収集は明日ね」

「お泊りするのぉ？　じゃあ、ベッドだね。温泉入ろうぉ！」

『こんなヤツらと、本当に勇者なんて探せるのか？』

宿屋のベッドの上で、ノピノプの静かな寝息を聞きながら、大きな不安を抱えていた。

パパパ：悪ガキLv.4【攻撃力10　防御力5　速さ5　魔法攻撃力15　魔法防御力15　生命力65　魔法力0】

ニコムリン：パシリLv.5【攻撃力9　防御力3　速さ10　魔法攻撃力0　魔法防御力0　生命力50　魔法力0】

ノピノプ：戦士Lv.2【攻撃力32　防御力26　速さ11　魔法攻撃力0　魔法防御力20　生命力115　魔法力0】

サラ：WMマスターLv.2【攻撃力68　防御力51　速さ37　魔法攻撃力75　魔法防御力55　生命力370　魔法力150】

『あゝ！　意味がわかんねえ！　Lv.Upしても、強くなんねえじゃねえか！　もう意味不明だよ。イミフだよ！！』

### 勇者を探して3【レベルアップ】

今日は、朝から情報収集を開始した。ノピノプとサラは、役に立たないので、俺とニコムリンがメインになって町中を歩き回る。

ひとまず聞く事は二つだけ。近くの町や村の場所。あとは駄目元で、勇者の情報だ。

手当たり次第に、町中のオッサン・オバハン・ガキ・野郎・お姉様に話を聞いて回るが、結局勇者に関する情報については、全く掴めなかった。

この町を出ると、次の町まではかなりあるらしい。歩いて行くとなると、最低でも五日はかかるそうだ。

そう言われてみれば、この町には、それなりに強そうなヤツらが、ごろごろいやがる。少し納得できたような気がした。

宿屋の前に戻ると、ノピノプが無邪気に石の下にいるダンゴムシを、せっせと袋に入れている。

「ノピノプ！ それ大事な道具袋！」

慌てて取りに行こうとすると、サラが立ちほだかり、話し掛けてきた。

「ちよつとパパパ。情報収集の結果、どうだったのよ」

「ちよつと待つてくれ。先にあの袋を……」

「袋なんて後回しでいいわ！ あなた達、私達が頼りないからって、二人で出掛けたのよね！ それなのに、帰ってきたと思ったら、報告も無しに袋の心配？ リーダーする気があるんだったら、もう少しリーダーとしての責任感持ちなさいよね！」

そんなサラの言葉を聞いている間にも、ノピノプはせっせせせせと、ダンゴムシを入れ続けている。気が付くと、「面白いか？」とニコムリンも参加しているではないか。

「サラ。報告は、ちゃんとする！ だから、ちよつと先に袋を……」

サラをすり抜けようとした俺だったが、「だから袋は後！」と耳を引っ張られ、元の位置に戻された。

『こうなったら、さっさと報告して、袋を取り戻さなければ……』

「わかった。報告するよ。まずは勇者だけど、やっぱ、いきなり初めの町で情報が掴める程、甘くねえわ。で、次の町は、歩いて最低でも五日はかかるんだと。それなりに強くなるまでは、この町から離れられねえな。って、これでいいだろ！」

早口で報告を済ませると、袋奪還へ急ぐ。

「ちよっと、待ちなさいよ」

また、止められた。もう報告は、済ませたのに。

「そうなんだ。次の町まで、五日もかかるんだ。じゃあ、勇者探しは、しばらくおあずけね。……でね、私達も少し情報収集をして、有益な情報を掴んだの。聞きたい？」

『これは嫌がらせだ。ただの嫌がらせだ。俺を袋から遠ざける、ただの嫌がらせだ。ここで嫌がったり、拒否をしたところで、捕まっ  
て「聞きなさい！」とか、言われるんだ。だったら、初めっから聞  
い  
い  
と  
い  
た  
方  
が  
無  
難  
だ  
な  
』

頭の中で素早い計算をし、諦め半分で軽く頷いた。

「よかったあ。要らないとか、言われたらどうしようかと思ってたんだ」

『よく言うぜ』

「それじゃあ、本当に凄い情報だからびっくりしないでね」

『おいおい。ニコムリン、そのダンゴムシをどうすんだよ……』

「魔王の城なんだけど……」

『どうして、こっちに持ってくんだよ！』

「この町の裏山にあるんだって……」

『それをどうするつもりだあ！』

「もうさ、勇者探さずに、私達で魔王倒しちゃおうか？」

『なるほど！ よっしゃ！ やってまえ！』

「どう思う？」



『今だ！ そこだ！』

「ねえつてば、どう思っの!？」

「行けええええ!！」

「キヤア！ びっくりした。どうしたの？ 突然、大きな声出して……。つて何してるのよ、アンタ。ノピノプの相手でも、してなさいよね」

サラの襟元に、ダンゴムシを入れようとしていたニコムリンだったが、呆気なくサラに発見され、ノピノプのもとへ突き返された。

「あれ？」

「あれ？ じゃないわよ！ それじゃあ、行くのね。じゃあLv・Upしないといけないわね……」

一人で盛り上がるサラを見ながら、『何処に行くんだ?』と思っ  
たが、『袋！ 道具袋!！』と頭に浮かぶと、一目散にノピノプの  
もとへと走り込んだ。

「もうそれ以上、ダンゴムシ入れんじゃねえよ!！」

「ちょっと待ちやがれ！ そんな事決めたヤツは、どいつだよ!」

ニコムリンに怒鳴られたサラは、すぐさま俺を指差した。

「え？ 俺？ いつ決めた？ そんなこと……」

「言っただじゃない!」「行けええええ!！」つて。それとも、何!  
? あれは違うとか、言うんじゃないわよね!？」

全く覚えはなかったが、ここで「そんなの知らねえよ!」なんて  
言おうものなら、後々どうなることかわかったものじゃない。

「よく考えろ。何処にいるかわからない、勇者を探して旅をする  
事を考えれば、すぐ近くに居る魔王を、ここでぶっ飛ばした方が、  
断然楽じゃねえか!？」

「でもよパパ。このパーティー、戦闘員が、悪ガキとパシリで、  
非戦闘員が戦士とWMマスターなんだぜ。勝てると思っのかよ!？」  
「だから、Lv・Upしてだな……」

「土下座が上手くなったり、力が上がった気になるだけの、Lv・

Upでかよ！」

確かにそれも一理ある。蝸牛一匹に長時間かけて、戦う悪ガキとパシリ。傍観する戦士とWMマスター。魔王との決戦で、雌雄を決するのがどちらかなんて、一目瞭然だ。

「しかしよお……。俺も覚えてねえんだけど、やるって言っちゃったもんを、撤回できねえだろ？」

ニコムリンの傍に近寄ると、チラチラ、サラを確認しながら、小声で耳打ちする。

「でも、このままじゃ、確実に俺達死ぬぜ」

「もしかしたら、もう少ししたら、グンツと強くなるかもしれないじゃん」

「それを言ったら、ずうっとチンケなLv・Upしか、しねえかもしねえじゃん」

「それを言ったら、身も蓋も無いじゃん」

「でも、本当の事だろ」

コソコソと話をしている俺達を見て、サラがゆっくりと近付いてきた。

「って訳だよ、ニコムリン。これから、頑張ろうじゃないか」

「わかったよ、パパパ。じゃあ、頑張つてLv・Upしないといけないな」

「ハハハハハ……ハア」

笑いは乾いていたが、サラに気付かれずに、済んだようだった。

「じゃあLv・Upに生きましようか！？ 二人とも！ 頑張んなさいよ！！」

『おいおい……。テメエは、はじめっから、戦わない気、満々かよ……』

町中で、Lv・Upする事は不可能なので、とりあえず町の外に出る。その途端、サラがとんでもない事を言い出した。

「手っ取り早くLv・Upする為には、チマチマ倒すよりも、まと

めて倒した方が早そうね。よし！ モンスターの群れを探すのよ！」

『デメエ、戦いもしねえくせに……』

と思ったが、愚痴を言っても始まらないので、出来れば一匹ずつがいいと思いながら、モンスターを探して歩いた。

「うわあ。ぶによぶによが、ついてくるよあ」

見渡す限りの平原には、モンスターどころか、冒険者すらも見当たらない。

「ぶによぶによ。殖えていくよあ」

「もう少し、進んでみるか？」

モンスターを探して、平原を歩くと、こんなに平和なら、次の町まで行けるのでは？ と思えてくる。

「ぶによぶによいっぱい、気持ち悪いよあ！」

ノピノプが、なんだかうるさい。こんな時は、たいてい良いことがないのだ。振り返り確認すると、俺達の前方には、全く姿を見せなかったモンスターが、徒党を組んで、俺達に近付きつつあった。

「おいサラ！ あの気持ちの悪いの、何ていうモンス……」

「……………」

咄嗟にサラへ確認しようと、話し掛けたが、サラは聞いた事もない言葉をブツブツと呟きながら、鉄の杖を、空へと掲げていた。

もう一度、モンスターの方へ目を向けると、「ぶによぶによ気持ち悪い！！ あっち行け！ いなくなれ！！」と、ノピノプがモンスターを一刀両断に、ぶち殺している。

『おいおい、どうなってるんだよ？』

と、ニコムリンを見ると、呆氣にとられ、間抜け顔でノピノプを眺めていた。

「ノピノプ、危ないからどいて！！」

サラは、そう叫ぶと同時に、「悪しき者よ、紅蓮の業火で消滅せよ！ 《炎の渦》！！」と叫ぶと、モンスターの方へ杖の先端を向ける。

それと同時に、地面から無数の火の竜巻が出てきたかと思うと、

ぶによぶによモンスター達を、一匹残らず消し炭へと変えていった。  
「おおおお！ スゲエ！ スゲエなお前ら！！」

俺がサラに声をかけた瞬間、「ぶによぶによつつけたよ！ 凄いでしょ！ ニコムリン凄いでしょ！」と、声が聞こえ、ノピノプとニコムリンが、手を繋いで跳びはねていた。

「なあサラ、今のモンスターは、何ていうモンスターなんだ？」

「パパパ、あれも知らないの？ あれは、ジェリースラームっていう、原始モンスターよ」

俺を小馬鹿にしたように見ると、「ちょっとは、勉強しなさいよね」と付け足した。

ポンポンピリリン。ポンププリンと、Lv・Upカウンターが、奇妙な音を出し始めた。

「Lv・Upだ！」

慌てて、カウンターを取り出す。

（【パパパ・ンパ・ペペンペン】は、Lv・が【5】になった。パシリが使えるようになった。【パパパ・ンパ・ペペンペン】は、Lv・が【6】になった。攻撃力が5上がった。【パパパ・ンパ・ペペンペン】は、Lv・が【7】になった。防御力が10上がった。【パパパ・ンパ・ペペンペン】は、Lv・が【8】になった。速さが15上がった）

（【ニコムリン・ヨボヨボ・フリフリリン】は、Lv・が【6】になった。土下座が更に上手くなった。【ニコムリン・ヨボヨボ・フリフリリン】は、Lv・が【7】になった。相手の顔色を見る事を覚えた。【ニコムリン・ヨボヨボ・フリフリリン】は、Lv・が【8】になった。速さが20上がった。【ニコムリン・ヨボヨボ・フリフリリン】は、Lv・が【9】になった。水鉄砲の所持を許された。【ニコムリン・ヨボヨボ・フリフリリン】は、Lv・が【10】になった。媚びへつらうを習得した）

（【ノピノプ・ボポン・アイヤーン】は、Lv・が【3】になった。攻撃力が12、防御力が10、魔法防御力が7、生命力が20上がった）

った。【ノピノプ・ボポン・アイヤーン】は、Lv.が【4】になった。攻撃力が10、防御力が5、速さが5、生命力が30上がった）

（【サラ・デ・リーリア】は、Lv.が【3】になった。攻撃力が15、防御力が10、速さが5、魔法攻撃力が10、魔法防御力が8、生命力が22、魔法力が34上がった）

カウンターが全てを言い放った瞬間、ぶちぎれたのは、ニコムリン一人だった。俺は、少しだけでも、能力が上がったので、キレるには到らなかった。

パパパ：悪ガキLv.8【攻撃力15 防御力15 速さ20  
魔法攻撃力15 魔法防御力15 生命力65 魔法力0】

ニコムリン：パシリLv.10【攻撃力9 防御力3 速さ30  
魔法攻撃力0 魔法防御力0 生命力50 魔法力0】

ノピノプ：戦士Lv.4【攻撃力54 防御力41 速さ16  
魔法攻撃力0 魔法防御力27 生命力165 魔法力0】

サラ：WMマスターLv.3【攻撃力83 防御力61 速さ4  
2 魔法攻撃力85 魔法防御力63 生命力392 魔法力18  
4】

「さあて、どんどんLv.Upしていこうじゃねえか！ ジェリースラム、また来いよ！ テメエらだったら、サラもノピノプも、大戦力だー！」

「ちよつと待てえ！ コラア！！ 土下座が更に上手くなったり、水鉄砲を持てたり、媚びへつらったり出来るだけの俺は、どーすんだよー！！ バーロオー！！」



## 勇者を探して4【レベルアップ、そしてレベルアップ】

ジェリースラームを倒して調子に乗った俺は、虫でも動物系でもないモンスターを探し求めていた。

平原を360度見渡し、動物系や虫系のモンスターを発見すると、戦闘区域から離脱する。そんな事を繰り返しながら、しばらく歩き続けていると、平原を抜け、林へとたどり着いた。

「おいパパパ。どこまで行くんだよ！」

歩き回るだけに、不信感を覚えたのか、ニコムリンがイライラしている。

「ちよつと耳を貸せ」

「何だよ」

「アイツら二人が、戦えば強え。でも、動物系や虫系は、可哀相だの嫌いなので、戦いやがらねえ」

「だから何だよ!？」

「だから、動物系や虫系以外のモンスターなら、俺達や、楽しんでし  
v・U p出来んじゃないかねえか」

「ほう。なるほどなるほど。パパパ、ずるいな」

「頭が良いと、言ってくれよ」

そんな事を話ながら、林の木にもたれ掛かった。

「パパパ駄目! 早くそいつから離れて!!」

サラの声が聞こえた瞬間、俺達の周りの木が突然動き出した。

「ツリーウォーカーか!」

咄嗟に、ツリーウォーカーの幹を鉄の棒で殴り付けると、辺りを見渡した。

「パパパ! 俺達、囲まれてんじゃないか!？」

ニコムリンのペーパーナイフが、珍しく役に立つようで、ツリーウォーカーの幹を剥ぎ取っている。

「よし! これなら俺達で!!」

構えに入ろうとした瞬間、周りのツリーウォーカー達が、一斉に燃え上がる。そこへ、まるで手慣れたきこりかのように、ノピノプが飛び込んでくると、一本、また一本と、ツリーウォーカー達を切り倒していった。

「で、出る幕がねえ……」

「俺ら……、雑魚くねえ？」

顔を見合わせ、ため息混じりに小言を言っていると、Lv・Up カウンターが鳴り響いた。

（【パパパ・ンパ・ペペンペン】は、Lv. が【9】になった。攻撃力が12、速さが8、生命力が26上がった。【パパパ・ンパ・ペペンペン】は、Lv. が【10】になった。攻撃力が18、防御力が12、魔法攻撃力が14、魔法防御力が11、生命力が27上がった。【パパパ・ンパ・ペペンペン】は、Lv. が【11】になった。攻撃力が13、防御力が10、速さが24、生命力が47上がった。）

（【ニコムリン・ヨボヨボ・フリフリリン】は、Lv. が【11】になった。土下座のプロになった。【ニコムリン・ヨボヨボ・フリフリリン】は、Lv. が【12】になった。買い物上手になった。【ニコムリン・ヨボヨボ・フリフリリン】は、Lv. が【13】になった。節約術を覚えた。【ニコムリン・ヨボヨボ・フリフリリン】は、Lv. が【14】になった。生命力が100上がった。【ニコムリン・ヨボヨボ・フリフリリン】は、Lv. が【15】になった。今回はLv・Upなんてどうでもいい）

（【ノピノプ・ボポン・アイヤーン】は、Lv. が【5】になった。攻撃力が13、防御力が15、生命力が27上がった）

「だからちよつと待て！！　どうして俺だけ、強くならねんだよ！　土下座のプロって何だ！？　買い物上手になったり、節約術を覚えてどうする！？　俺は母ちゃんか！？　っていうか、テメエが何で、Lv・Upなんてどうでもいいって言うんだよ！　馬鹿にしでんのか！！」



ニコムリンは、大声を出しLv・Upカウンターを地面に投げ付けたが、しばらくしてから、拾い上げると、傷や破損箇所がないか、入念に調べていた。

でもまあ、気持ちはわからん訳ではないけどな……。

サラが魔法の連発しすぎで疲れたらしく、モンスターを探しつつ、町へ一旦戻ることにした。

ニコムリンは納得いかないらしく、「Lv・Up」「Lv・Up」と呪文のように唱えてる。

「あ！ ワンワン来た！ ワンワン来たよお。ワンワン走ってくるよお」

一人やけに無邪気なヤツがいるのだが……。

「……ってワンワン！？」

慌てて辺りを見渡すと、ウォルフが四匹走ってくる。

「うし！ Lv・Upして、どれだけ強くなったか試してみるか！」

走り込むウォルフを待ち構えながら、鉄の棒を握り締めた。

「ワンワンお手！」

無邪気な戦士は、ウォルフ相手にお手を要求している。

「下がってるノピノプ！」

叫ぶと同時に、ウォルフのもとへ走り込むと、一匹の頭部を殴り付けた。キヤイン。と情けない声をあげて、ウォルフが沈黙する。

「よし！ 確実に強くなってるんじゃないか！？」ニコムリンは役に立たねえから、後の三匹も殺っちまうか！？」

仲間がやられて、怯むウォルフを立て続けに、二匹殴り飛ばす。

初めのウォルフと同じように、情けない声をあげて沈黙する。

「へ！ 余裕になってきたんじゃないか！？」

勢いに任せて、最後の一匹を殴ろうとした時だった。

「だめえ！ ワンワン、痛い痛いって。ワンワン、嫌々しているよお。ほら、お手だってするし……。ちんちんだって、するんだよお」  
止めに入ったノピノプの後ろに隠れたウォルフは、ノピノプの右

手に右足を、ちょこんと乗せて尻尾を振っている。

『お前は魔獣使いか!』

そう思っていると、ウォルフは逃げるように走り去っていった。獲物が……。Lv・Upの素が……。と嘆く間もなくポンポンピリン。ポンププリンと、Lv・Upカウンターが鳴り響く。

（【パパパ・ンパ・ペンペン】は、Lv・が【12】になった。攻撃力が10、速さが12、魔法攻撃力が10、魔法力が24上がった。【パパパ・ンパ・ペンペン】は、Lv・が【13】になった。防御力が12、速さが8、魔法防御力が17、生命力が31上がった）

（【ニコムリン・ヨボヨボ・フリフリリン】は、Lv・が【16】になった。エアガンを持つ仮免許を得た。【ニコムリン・ヨボヨボ・フリフリリン】は、Lv・が【17】になった。攻撃力が2、防御力が1、速さが9上がった。【ニコムリン・ヨボヨボ・フリフリリン】は、Lv・が【18】になった。靴を舌で磨けるようになった。【ニコムリン・ヨボヨボ・フリフリリン】は、Lv・が【19】になった。後少しの辛抱だ。【ニコムリン・ヨボヨボ・フリフリリン】は、Lv・が【20】になった。二枚舌が三枚舌にパワーアップした）（【サラ・デ・リーリア】は、Lv・が【4】になった。攻撃力が17、速さが12、生命力が19、魔法力が26上がり、新たな魔法を覚えた）

「くそおおお!! 後少しの辛抱って何だよ! 靴なんて舐めねえし! 三枚舌って、八方美人か俺は!? なんなんだよ、この職業はよ!」

ニコムリンが荒れている。尋常でなくくらい荒れている。ヤツももう、何処に怒りをぶつければいいのか、わかんねえんだな……。ご愁傷様……。

『パシリじゃなくて、よかったあ……』

そう感じたのは、俺だけじゃない筈だ。

町に入る前に、裏の魔王城を見学に行こうという話になった。実質、劇的にLv・Upしているのは、俺とニコムリンだけであって、サラもノピノプも、たいして強くはなっていない。もしかすると、町の表には雑魚が多くて、裏側に高Lv・なモンスターが、いるんじゃないか？ というのも、狙いの一つであった。

特に何の変哲もない、平原を進みながら、町の裏側へと回り込むと、城なんて物はなく、小さな小屋があるだけだった。モンスターも特にいないし、ガセネタだったんじゃないの？ と、思ったりした。しかし、小屋の中を覗いた瞬間、そんな甘い考えは、吹き飛んだ。

小屋の中は、人が息をする事も出来ないくらい、障気に満ちており、その中で一匹のモンスターが、じつと、こつちを見ていたのだ。しかしそのモンスターは、攻撃どころか、襲ってくる様子もなく、ただただ、こちらを睨み続けている。

「テ、テメエ……が、……魔王……なの……かよ……！？ じゃなくで、……なのですか？ じゃなくて、……なのかよ！？」

出来るだけ声を張り上げ、小屋のモンスターに話し掛けたが、モンスターは、少しも動かず、少し笑っただけだった。

「あなたを……、じゃなくて……、お前を……、でもなくて……、テメエを……、そのうち、倒しにきて……やるから……な！」

そう言った途端、小屋のモンスターは大きな声で笑い、「そうだな。この世界には、赤い兜を被り、青い鎧に身を包み、緑の小手に、黄色いブーツ、七色の盾に、透明の剣を持った、勇者なる者があるらしいな。もし、お前達が、その勇者とやらを連れて来たら、勝負してやつてもよいぞ」と言い放った。

『なんだ？ その装備は。まるでピエロじゃねえか……』

そうは思いつつも、その威圧的な視線に、どうする事も出来ない俺達は、小屋からそそくさと立ち去った。

「おいパパパ！ 結局、勇者探さねえと、いけねえんじゃないか！」  
「しゃーねえだろ！ 魔王の注文なんだからよ！」

「赤鬼さ〜ん。青鬼さ〜ん。こっちこっち〜」

「どちらにしても、もうしばらくLv・Upしないといけないわね」  
「結局、そうなるのかよ。俺も強くなんねえかなあ……」

「鬼さんこちら、手のなる方へ。あはははは」

「そんじゃ、まあ、町で一息ついたら、続きやろうか」

「それしかなさそうね」

「赤鬼さんも、青鬼さんも、おつきいねえ！」

「ってノピノプ！ 何連れて来てんだよ！！」

「うわああああ！！ 鬼だ！ ヒュムホーンじゃねえか！？」

「後は任せた！ ガンバレ！ 俺の分まで！」

そう言って、戦闘区域から離脱したニコムリンを尻目に、俺とサ  
ラは、人間の約1.5倍の大きさのヒュムホーンへと走り込んでい  
った。ノピノプは……、戦力外だな。やけに楽しそうだ。

サラは走り込むと同時に、ノピノプから鉄の剣を奪い取ると、赤  
いヒュムホーンの左足を斬り付けた。ブシュウツ！！ と音を立て  
て左足を切断されたヒュムホーンは、バランスを崩して倒れそうに  
なる。そこへ俺が、正面から飛び込み、ヒュムホーンの顔面を力い  
っぱい殴り飛ばした。バランスが悪いうえに、強打を受けたヒュム  
ホーンは、その大きな身体を支える事も出来ずに倒れ込んだ。

「まずは一匹いい！！」

「次行くわよ！」

残りのヒュムホーンを探して、瞬時に立ち上がった俺達だったが、  
目の前の光景に、ただただ黙祷を捧げるしかなかった。

ノピノプが、得意とする地獄の鬼ごっこ。その鬼役が、ノピノプ  
に渡されたのだ。ヒュムホーンは、鬼ごっこのルールなんて知って  
いる筈がない。しかしノピノプは、とても嬉しそうにしている。「  
あ！」と、サラが声に出した瞬間、ヒュムホーンの両足は、関節と  
逆方向へ折り曲げられた。「グオオオオオ」と、悲痛な声を出すヒ  
ュムホーンへノピノプは、「あははははは」と笑いながら、その  
両腕を引きちぎった。

「鬼さん、痛い？　鬼さん、痛いの？　鬼さんは、鬼だから痛くないよね？」

意味のわからない事を言いながら、腕の無くなった断面に、自分の手をつ込み、その中をグリグリと掻き回している。ヒュムホーンは、悲痛な叫び声をあげながら、のたうちまわったが、ノピノプに押さえ付けられたまま、腕のついていた断面から、身体の中を掻き回され、白目をむいて気を失った。

「鬼さん。こんな所で寝たら、風邪ひくよ。鬼さん、鬼さんてばっ！　もつと、遊ぼうよお……」

ヒュムホーンの肩を掴み、地面にヒュムホーンの後頭部を打ち付けながら、叫び続けるノピノプを見て、ヒュムホーンに同情した俺達は、ノピノプを引きはがすと、その場を立ち去った。

「鬼さん！　また、遊ぼうね！」

ヒュムホーンからノピノプを引き離すと同時に、Lv・Upカウンターが、鳴り響いた。

（【パパパ・ンパ・ペンペン】は、Lv・が【14】になった。攻撃力が13、魔法攻撃力が14、生命力が29上がった。【パパパ・ンパ・ペンペン】は、Lv・が【15】になった。防御力が10、魔法防御力が14、生命力が25上がった。【パパパ・ンパ・ペンペン】は、Lv・が【16】になった。攻撃力が11、速さが12、生命力が34、魔法力が21上がった。【パパパ・ンパ・ペンペン】は、Lv・が【17】になった。ただLv・が上がっただけだった）

（【ニコムリン・ヨボヨボ・フリフリ】は、Lv・が【21】になった。噂話に鋭くなった。【ニコムリン・ヨボヨボ・フリフリ】は、Lv・が【22】になった。土下座を他人に教えられるようになった。【ニコムリン・ヨボヨボ・フリフリ】は、Lv・が【23】になった。他人の頼みを無視出来なくなった。【ニコムリン・ヨボヨボ・フリフリ】は、Lv・が【24】になった。攻撃力が19、速さが28、生命力が46上がった。【ニコムリン・ヨボヨ

ボ・フリフリン】は、Lv. が【25】になった。パワーアップ八方美人になった。【ニコムリン・ヨボヨボ・フリフリン】は、Lv. が【26】になった。喜んで毒味が出来ようになった。【ニコムリン・ヨボヨボ・フリフリン】は、Lv. が【27】になった。Lv. Upしても強くないので、ヤケクソになってきた。【ニコムリン・ヨボヨボ・フリフリン】は、Lv. が【28】になった。速さが25、生命力が25上がり、もう少しの辛抱だと悟った）

（【ノピノプ・ボポン・アイヤーン】は、Lv. が【6】になった。攻撃力が27、防御力が13、魔法防御力が11、生命力が47上がった。【ノピノプ・ボポン・アイヤーン】は、Lv. が【7】になった。攻撃力が19、防御力が20、速さが10、生命力が43上がった）

（【サラ・デ・リーリア】は、Lv. が【5】になった。攻撃力が19、防御力が17、速さが14、魔法攻撃力が24、魔法防御力が21、生命力が35、魔法力が28上がった）

「あゝ！ 意味不明だ！ ヤケクソになったって、誰のせいだよ！ パワーアップ八方美人って、何がきんだよ！ あゝ、もうやめたやめた。もう、うぜえわ！」

『スゲエLv. Upカウンター。ヤケクソになってる』

『凄いわLv. Upカウンター。本当に、ヤケをおこしているわ』

「鬼さゝん！ バイバゝイ！！ また、遊ぼうねえ！」

まともりのなくなった俺達だったが、ひとまず町へ転がり込んだのだった。

パパパ：悪ガキLv. 17 【攻撃力92 防御力59 速さ84  
魔法攻撃力53 魔法防御力57 生命力284 魔法力45】

ニコムリン：パシリLv. 28 【攻撃力30 防御力4 速さ9  
2 魔法攻撃力0 魔法防御力0 生命力221 魔法力0】

ノピノプ：戦士Lv.5 【攻撃力113 防御力89 速さ26  
魔法攻撃力0 魔法防御力38 生命力282 魔法力0】

サラ：WMマスターLv.4 【攻撃力1119 防御力78 速  
さ68 魔法攻撃力109 魔法防御力84 生命力446 魔法  
力238】

『ニコムリンには悪いが、俺は確実に強くなってんじゃねえか!？』

## 勇者を探して5【念願の……】

目的がふりだしに戻ってしまった俺達は、良くも悪くも、Lv・Upに明け暮れるしかなかった。勇者を探そうにも、町の中をうろろしているだけでは、仕方ない。次の町へ向かうにも、歩いて最低でも、五日かかる。その間に、何度モンスターと遭遇するのは、予測することは出来ない。そして俺達は、その能力・モンスターの得意不得意がバラバラで、戦闘における戦闘員は、一回二人程だという事だ。極め付けは、戦闘員になりたい非戦闘員がいる事だ。

「何、何？ それって、もしかして俺のこと？ 俺だって、強くなりてえよ！ でも、Lv・が上がりても、強くなんねえんだから、しやあねえじゃねえか！！」

「それでは皆さん、今日も頑張りますか？」

「気持ち悪い話し方しないでよ！」

「パパパ、真面目似合わない」

「うつせえよ！ ほら！ 行くぞ！！」

宿屋から出て、今日もLv・Upの為に、モンスター討伐へ出発する。少し前までは、【悪ガキ】と【パシリ】は、戦力外だったが、今や俺は立派に戦力となった。ただ武具がヘボイのが、玉に瑕だけど……。

町の外には、見渡す限り平原が広がり、今日も、モンスターの姿は見えない。こういう時、一番頼りになるのは、ノピノプなのだ。どこからともなく、モンスターを呼び寄せてくる。だから今日も、あてもなく散歩する事にする。

「ぶによぶによ、いっぱい来た。ぶによぶによが、いっぱい来たあ！ 気持ち悪いぶによぶによが、いっぱい来たああ！！」

ほら、ノピノプの隠された能力《魔獣使い》。これで、モンスター探しの手間が省けるって寸法だ。



『……って、あれ？』

ノピノプは、ジェリースラームがよほど嫌いらしく、乱心状態になり、一人でジェリースラームの大群の中で、暴れ回っている。サラも、魔法攻撃をせず、時折ノピノプに回復魔法をかけるだけだった。

「出番……ねえわな……やっぱり」

横で呟く声が聞こえた。

ニコムリンだ。俺も、似たような事を考えたが、コイツは、とことんそれを痛感しているようだな。当たり前か……。どれだけLv・Upしても、全く強くないんだから。

ノピノプが、肩で息をしながら、ジェリースラームの破片の中で立ち尽くしていると、いつもと同じように、Lv・Upカウンターの音が聞こえた。

（【パパパ・ンパ・ペペンペン】は、Lv・が【18】になった。攻撃力が11、防御力が14上がった）

（【ニコムリン・ヨボヨボ・フリフリリン】は、Lv・が【29】になった。防御力が10上がった。【ニコムリン・ヨボヨボ・フリフリリン】は、Lv・が【30】になった。生まれて初めて、パシリであると自覚した。【ニコムリン・ヨボヨボ・フリフリリン】は、Lv・が【31】になった。既に、強くなる事への執着はない。【ニコムリン・ヨボヨボ・フリフリリン】は、Lv・が【32】になった。あと1Lv・で、何かが起こる）

「あれ？　これだけ？」

「またかよ！　何が、強くなる事への執着は……だ！　あるよ！　あるに決まってるじゃねえか！　強くなりてえに、決まってるだろ！」

俺達の間には、かなりの温度差があるようで、ニコムリンの叫びを、もう聞きたくなかった。けれども、気になる事を言っていた。《あと1Lv・で、何かが起こる》と。いったい何が、起こるというのだろうか……。

「蝶々！ おつきい蝶々だよお！ 綺麗だねえ、おつきい蝶々お！」  
ノピノプは既に立ち直ったらしく、近寄るデカイ蝶、ビグバタライに見とれている。

「私、虫は無理だからね！」

サラの声が、ビグバタライと反対の方向へと消えていく。

「うわぁ。おつきい蝶々お。羽もおつきいねえ」

ノピノプが、そう言うのも当然だ。ビグバタライの大きさは、ヒュムホーンを4体合わせた程だ。下に入れば、屋根があるのかと、勘違いしてしまいそうになる。しかしビグバタライは、野生種の中では、極端に大人しく、大きさに反して、かなり弱いモンスターの分類なのだ。

「これならお前でも、戦えつたる！？ 行くぞ！」

ニコムリンの肩を、ポンと叩くと、俺は一足先にビグバタライの下に走り込むと、その重たそうな腹に、鉄の棒を投げ付けた。しかし、弾力性のあるその皮膚は、その攻撃に何も感じていないようだった。やる気なさ気に駆けてくるニコムリンに、指で上と合図する。軽く頷いたニコムリンは、俺の手を踏み台に、ビグバタライの上へとジャンプした。ビグバタライの背の上に乗ったニコムリンは、ペーパーナイフをその身に突き立てると、頭の方から、尻の方へ駆け抜け、臓器を撒き散らしながら、落下するビグバタライと一緒に、地面に降りた。

ポンポンピリリン。ポンププリン！ Lv・Upカウンターが鳴っている。しかし、今回もハモリが少ない。

（【ニコムリン・ヨボヨボ・フリフリン】は、Lv・が【33】になった。長かった下積み生活が、終了した。もうこれ以上、Lv・Upしない）

「……ん、だとお！！ Lv・Upしないって、どういう事だよ！ 全っっ然っ！ 強くなつてねえじゃねえか！！」

もう、ニコムリンの叫びは悲痛だった。でも、あのカウンターの言葉……。《下積み生活が終了した》……。これは……。

「ニコムリン！ 町へ帰るぞ！」

「どうしたんだよ、パパパ」

「早く帰っぞ！ いいから、帰んだよ！」

全く状況を理解していないニコムリンを引きずるようにして、俺達は、町へ戻ると、一目散に冒険者ギルドへ駆け込んだ。

「オッサン！ このギルド証と、カウンター見てくれ！」

ギルドのオッサンに、ニコムリンのギルド証とLv・Upカウンターを差し出すと、オッサンは理解した顔になると、それを手に取った。しばらく、カウンターを眺めていたが、目の前の台に静かに置いた。

「ニコムリン・ヨボヨボ・フリフリン君！ おめでとうございます！ 職業【パシリ】最高Lv・になりましたので、スキルアップが可能となりました！ さあニコムリン君、スキルアップ後の、次の職業を選んでください！」

「な、な、な、何い！ スキルアップうー！！ マジかよ！ パシリ脱出かよ！」

うなだれていたニコムリンは、跳び上がると、浮かれた様子で、オッサンの所へ近付いていった。

「ニコムリン・ヨボヨボ・フリフリン君だね。君には、三つの職業選択が可能となった。よく考えて、解答を聞かせてくれるかね？」

それでは、三つの職業を発表するよ。【鉄砲玉】【特攻隊】【下っ端】。この三つから、よく考えて、選んでくれよ」

「これって……、スキルアップ……してんのか……？ 【鉄砲玉】って、早い話パシリと変わんなくねえ？ 【特攻隊】、命の危険の香りが、プンプンすんだけど……。【下っ端】……、これが一番強そう……か？」

ニコムリンは、やる気のない表情で職業を選んでいたが、真剣な表情になったと思うと、オッサンの顔を見た。

「決まりましたか？」

「ああ、決まった」

「で、どれにしますか？」

「特攻隊……で、頼む」

「わかりました。それでは、ニコムリン・ヨボヨボ・フリフリン君は、これより職業を【特攻隊】にチェンジし、スキルアップします！」

オッサンがそう言った途端、ニコムリンのLv・Upカウンターが鳴りだした。

（【ニコムリン・ヨボヨボ・フリフリン】は、スキルアップし、Lv・が【1】になった。攻撃力が30、速さが15上がり、防御力が14、生命力が100下がった）

落ち込んでいるかと思い、ニコムリンを見たが「思った通りだな」と、余裕の表情を浮かべていた。

ギルドを出て武具屋に向かう。道中ニコムリンは無口だったが、特に落ち込んだ様子は、見られなかった。

「お、兄さん達また来たね。誰か、スキルアップでもしたのかい？」

「ああ、俺がスキルアップした」

「パシリの兄さんかい。で、何になったんだい？」

「特攻隊」

「そうか、特攻隊か。じゃあ、そのペーパーナイフとジャージは、引き取ろう。そして、この鉄の槍とスポーツシューズと交換してやろう」

「ペーパーナイフよりも、格段に強そうだな。……なあ、聞いてもいいか？　もし、鉄砲玉や下っ端だったら、どんな武器になったんだ？」

「知りたいか？　そうだな。知りたいわな。じゃあ、教えてやろう。鉄砲玉は、ペーパーナイフのままだ。そして下っ端は、この角棒だ。兄ちゃん、その選択は、ある意味正解だよ！」

「よし！　Lv・Up再開すんぞ！」

やけに張り切るニコムリンだったが、俺達は、胸につかえた不安

を、取り除く事が出来なかった。

パパパ：悪ガキLv.18【攻撃力103 防御力73 速さ8  
4 魔法攻撃力53 魔法防御力57 生命力284 魔法力45】

ニコムリン：特攻隊Lv.1【攻撃力60 防御力0 速さ10  
7 魔法攻撃力0 魔法防御力0 生命力121 魔法力0】

ノピノプ：戦士Lv.5【攻撃力113 防御力89 速さ26  
魔法攻撃力0 魔法防御力38 生命力282 魔法力0】

サラ：WMマスターLv.4【攻撃力1119 防御力78 速  
さ68 魔法攻撃力109 魔法防御力84 生命力446 魔法  
力238】

『ニコムリン……。本当に強くなったのか……？ 防御力0ってヤ  
バクねえか？』

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2384w/>

---

未完作品（放置していた過去の産物）

2011年11月30日10時50分発行